

戦後日本における「ホモ人口」の成立と「ホモ」の脅威化

男性同性愛に関する雑誌記事の言説分析

The Formation of the “Homo Population” and the Rise of the “Homo” Threat in Postwar Japan

A Discourse Analysis of Tabloid Magazines

石田 仁 (明治学院大学)

ISHIDA Hitoshi (Meijigakuin University)

webhitoshi@yahoo.co.jp

2001年の暮れに出版され、ベストセラーになった『もしも世界が100人の村だったら』には、「89人が異性愛者で、11人が同性愛者」という表現がみとめられる。近年では、「LGBT人口が〇%」というマーケット業界のウェブ調査の結果を受け、セクシュアル・マイノリティと人口を結びつける語り方が頻繁にされるようになった。調査の影響を受けた「13人に1人」「クラスに2~3人はいる」という表現は、セクシュアル・マイノリティの可視化をうながす一方で、「それならば、クラスの誰それがそうに違いない」という特定化やアウティング、いじめにもつながりかねず、この表現の持つ効果は両義的である。

仮にここで、『100人の村』式の記述において、「異性も同性も好きになる人」に光を当てようとするならば、「〇〇人が両性愛者」という一文を加え、その分、異性愛者や同性愛者の人数を減らすことになるのだろう。すなわちこの表現において、セクシュアリティ(性)は、それぞれ一定程度の人口を占める異質な人々がそれぞれに備える何かとなる。

こうした表現、もしくは考え方は、いつごろから人々に定着したのだろうか。それは例えば「同性愛者」の概念の成立と同時期だろうか、古川誠(1994)は「個人の内的・精神的な性のあり方」「アイデンティティ」を説明する「同性愛者」の概念が1920年代に成立したとし、「現在にいたるまでわたしたちの同性愛への認識を規定している」とも論じている。しかし、戦後の「風俗雑誌」の研究によると、性は流動的で可変的な、行為もしくは関係性としてとらえられていた(Ishida & Murakami, 2006)。「風俗雑誌」は60年代前半に下火になる。よって、異質な個々人が内面に具備するものという性の認識は、それより後のことではないだろうか。(予備的に言説を俯瞰してみても、「ホモにいそしむ」「二人はホモの間柄だった」[現在あまりみられない、行為または関係性として「ホモ」をとらえる語り]と、「あの人はホモだ」「ホモは知的だ」[現在でもみられる、「ホモ」を主体に結びつける語り]はかつて共起していたが、後者が優勢になっていくことからそれがうかがえる。)

しかしながらこうした問いはこれまで十分に解明されてこなかった。その一つに、ゲイ研究/運動が、「ホモ」は侮蔑語であり、避けるべきだとしてきた機制もあるのだろう。報告者も基本的にはその考え方に共感し、「ゲイ」を用いるべきと考える。ただし、侮蔑語の「ホモ」が長きに渡って使われてきた戦後の歴史の研究が進んでいないこともまた確かである。そこで本報告は歴史的な資料を扱う関係から、あえて「ホモ」と表記している。

本報告は上述の問いを明らかにするために、戦後の一般雑誌を対象に言説分析を行う。具体的には、(1)「ホモ」と「人口」を結びつける語りは、いかなる準備言説があつてのことか、(2)「ホモ人口」の語りの成立はいつ、どのように表現されたか、(3)その語りが成立した結果、新たにどのような言説を生み出し、またどのような効果をもたらすのに至ったのかを、質的なデータから解明する。なお、戦後資料の特徴上、男性の同性愛に限定する。この研究は、日本の言説と差別のあり方に対して一定の知見を与えるものと期待される。